

〔個人研究〕

チベット仏教文化の伝承と影響について

牛 黎 濤

はじめに

現在の世界は、約3000余りの民族が200余りの国家と地域に分布し、多数の国家が多民族によって構成されている。中国は五十六の民族による多民族国家である。筆者は中国各地を訪ね、いくつかの少数民族地域において、宗教信仰と宗教意識が文化符における重要な一面になっていることに気付いたのである。言い換えれば、宗教と文化の間に欠かすことのできない関係があるということである。宗教は、人類社会の構築において、一種の文化形式として民族間の交流、融合において巨大な推進力としての役割を果たしたのである。全ての宗教観念、すなわち天国・地獄、神仏など何であろうと、みな人類の自覚思惟の産物である。最終的には、宗教を通して、人文を語る目的と人心を改造する目的を果たし、人類社会の調和と発展を促進してきたのである。

筆者は多年にわたる現地調査を通じて、各民族の優秀な伝統文化を保護し伝承するために一番大切なことは、民俗という無形文化遺産をしっかりと保護することであると痛感したのである。そのためには、代々伝わる民俗文化活動の中から独特な風習とその魅力を自覚させることで、伝統文化が彼らの生活と不可分であることを理解してもらうことが必要となってくると考える。それこそが、近代化の進むチベット社会において、チベット仏教の長期にわたる歴史変遷を通じて、チベット民族の独特な考え方が継承され、チベット民族の知恵と徳行が積み重ねられて、チベット社会の発展と民衆生活の向上がはかられて、チベット民族の特色ある仏教文化体系を持続していくことにつながると思考するのである。

一、チベット仏教文化の概念

筆者は、チベット地域の異なる宗教文化の比較を通して、世界のそれぞれの宗教文化の思惟方式および特質を発見することができた。それは、チベット仏教が、民衆の持つ文明の重要な思想的源泉と精神的基盤をなし、チベット文化の絶えまない発展に寄与すると同時に、中国化された仏教が、チベットに中国文化という新しい価値観をももたらしたのである。このことは中国文化の独特な魅力を示す重要な根拠であり、中国社会における調和発展を促進する重要な源泉であると言えよう。筆者が問題提起すべきと考えるのは、従来のチベット文化研究に関する研究の大部分が、例えば、宗教、言語、芸術など、観念と形態についての記述のみであったことである¹。そして、チベット民族文化の宗教的な側面のみに注目し、民衆の生存の基盤として最も重要な物質文化を考慮しない傾向があったことである。生活は如何なる民族であっても物質文化を前提にしていなければ、観念と形態の文化も言及できないと教えている。なぜなら、物質が精神を決めるということは普遍的な真理であるからである²。また、チベット文化を研究するにはまず、「チベット」とは何かをはっきりさせる必要がある。中国において、チベットのことを少しでも理解している人ならば、チベットは自治区であって、地域の概念であり、地名であり、一つの民族名称というだけではないことが分かる。

それでは、チベットの名前はどこから来たのであろう。簡単にいえば、チベットは昔から六つの地方「ウ」、「ツァン」、「アムド」、「カム」、「ガリ」、「チャンタン」に分けられていた。「ウ」は中央チベットの東部であり、「衛」の字が当てられる。「前蔵」とか「内蔵」とか呼ばれることもあり、チベットの都ラサや古代の都ヤルルンがあった。「衛蔵」から蔵を取って、地理的に中国の西部に位置したことから、清代から現われた中国語では、西藏（チベット）と称したのである。この語は、当時、主に東部の「康区」に対しての名称であった。東部の蔵区（現四川西北部とチベットの昌都等の地域）を東蔵と呼び、過去の「西藏」と今日の「西藏」とでは地域範囲において大きな変化があり、伝統のチベットには現在の昌都地域が含まれなかった

が、今日では昌都もチベット自治区の一部になっている。本稿において、「チベット」と称する場合、現在中国地図上に規定されているチベット語圏を研究対象にする。

次に、チベット文化とはどのような内容が含まれているといえるだろうか。簡単にいえば、チベット民衆が数千年にわたって形成された長い文明の歴史において創られたすべてであり、チベット民衆の手によって創造された全ての物質と精神の産物である。そして、チベット仏教とは、チベット、青海、甘肅、四川などのチベット民族の居住地、およびモンゴルなどの他の民族と地域に広く浸透した宗教であり、チベット地域の民衆の日常生活に深く根を下ろしている。

文化事象をも含むチベットは、チベット仏教の中心活動区域として、庶民の仏教信仰が盛んであり、信仰形態も多様であるが、そもそも、チベット仏教とは、外来宗教である仏教とボン教の結合であり、単にインド仏教の移植ではなく、インド仏教のヒマラヤ大地における伝播過程の中で、固有の宗教ボン教と対立、摩擦、また妥協、吸収、融合の結果形成された仏教の一形態なのである。チベット仏教における教義は仏教だが、祭祀礼儀等には濃厚なボン教的色彩を帯びていると言える。在来のボン教との融合は、チベットにおける仏教の伝播を加速させ、民衆の心に深く根を下ろしたのである。ボン教化された仏教は、地域性がさらに鮮明となり、かつ民族性にもその影響を強く与え、濃厚なヒマラヤの特徴とチベット民族の雰囲気醸し出すことになったのである。

チベット仏教が分布している中国西部区域は広大な土地を持つが、人口は僅か一千万人で、地域のほとんどが高山草原であり、チベット族のほとんどが遊牧民族である。このような地域、民族に、影響力を持つチベット仏教は、どのように形成されたのであろうか。チベットは、インド仏教伝来以前ボン教が最盛期に達していた。そのため、仏教のチベット伝来過程において、ボン教との戦いの中で難難曲折があったが、最終的に統治者の協力救援の下で、チベット伝統文化やボン教との相互融和をもとに、仏教の教義が人々の意識に浸透し、大多数のチベット民衆の拠り所となった。つまり、仏教自身も段

階的に「チベット化」され、独特のチベット仏教が形成されたのである。

こうしてインドよりもたらされた仏教は、チベットでの長期にわたる伝播と発展過程の中で、当地の思想・文化・習慣を絶えず吸収することで、次第にチベット社会の生活習俗に適応したチベット仏教となったのである。その思想はチベット文化と社会発展に重大な影響をもたらしたが、チベット仏教の宗教儀式、戒律および各種生活習俗も仏教の伝播につれて中国の民間に入り、一部が民衆の日常生活と結合しチベット民俗にとって無くてはならない文化的構成要素となったのである。

中国西部に位置する青海チベット高原は、広大であるが人は少なく、気温が低く酸素が少ない。ましてや遊牧を主とする地理環境と生活環境では、布施を中心とする熱帯と亜熱帯の南アジアにおける布教活動に比べて、僧侶の衣食問題を解決することはできないだろう。布施が期待できないチベットでは、僧侶集団は家族の支援に頼って修行生活を維持している。チベットにおける仏教教団と社会との緊密な双方向的な関係は、教団が社会に依存せざるをえない局面が現れ、濃厚な社会との接触問題も残されたのである。またチベットの特別な地理環境とボン教が王権より先に登場した歴史的条件が、社会の宗教への依存を強め、宗教を通じて、厳しいヒマラヤの自然環境を理解し、宗教を通して王権統治を補助してきたのである。

二、チベット社会の教育

チベット民族の伝統教育方式は、社会と寺院との関わりの歴史発展の過程において次第に形成された。たとえば、伝統教育は社会（家庭を含む）教育を主としているが、学校が存在しないチベット社会では、寺院教育も重要な役割を担っていた。そして、寺院におけるチベット民族の伝統教育は二つの方面に集約される。一つは社会（家庭を含む）教育であり、二つ目は宗教教育である。

前述の通り、教育を行う特設の学校や専門の場所がないチベットでは、教育を受ける青少年にとって、社会や家庭の場が教育を受ける教室となり、ま

た、人生の学校にもなった。

家庭は、伝統教育の重要な場所であり、社会として必要な技能、生活経験、礼儀に関する知識は、ほとんど家庭生活の中で身につけられるのである。そして、家庭は伝統教育の場だけでなく、宗教教育における青少年の基礎かつ重要な啓蒙教育の場となっている。数多くの事例によって明らかにされているが、幼少期から受けた家庭信仰と教義と宗教的規範は人生に影響する可能性が高く、しかも、生涯における信仰基礎も形作られる。同時に他の宗教に対する認識にも影響されて、信仰の基礎が形成されるのである。さらに、よい宗教教育によって理性に対する知識の向上が期待され、をみがき、精神の依り所も得られる。よって、体と心の両面から均等に発展できることになるのである。

そもそもチベット民族は家庭教育を非常に重視する傾向がある。具体的には、チベットの大部分の地域の家庭において、男子は8～9歳になったら両親と一緒に農作業に参加し、生産の経験と技術を勉強する。12歳頃になると、大人と一緒に狩猟し、狩猟方法を学ぶと同時に、苦勞に耐えられるように勇敢な精神を培う。女の子は10歳頃から、できる限りの家事労働に参加し、両親から種播きや、田植えなどの知識を教わり、母親からは紡織や裁縫、針仕事などの技巧を教わるのである。

道德教育においては、年上の人は常に子供に対して正直で、窃盗をしてはならず、団結してお互いに助けるなどの道理を教える。母親は娘に座り方や横になる姿勢、接待の礼儀も教える。さらに、成長すると母親は娘に対して性教育を行うのである。

チベット民族の家庭教育は、両親が教育者の役割を果たしているが、一方の被教育者の子女は主に目や耳から覚えたり、知らず知らずの内に感化されたり、あるいは大人の観察、真似などを通して、各種の生活の知識と技能を身につけるのである。

また、宗教教育はチベット仏教文化伝承の主要ルートの一つであり、そこには、家庭宗教教育と寺院宗教教育という二つの形式が含まれている。中国仏教信仰と違って、チベット仏教のもう一つの著しい特徴は、中国仏教と異

なり、チベット民族全体が信仰する全民信教という点である。この特徴は、一面では家庭宗教経験と宗教生活がチベット仏教文化の伝承において重要な地位を占めることを決定し、チベット仏教信仰を中心にして宗教生活と世俗生活の一致を体現したのである。

チベットでは、個人の宗教の受容は家庭から始まり、家庭の社会化を通して実現されるのである。家庭の宗教傾向と生活経験は、個人の宗教性の発展を決定付ける。すなわち家庭という特定の宗教環境の中で、次第に「信徒として成長する」のである。チベットの家庭では基本的な倫理実体として、個体に自然生命を与えるばかりでなく、同時に生命誕生時から倫理育成をも施すのである。

家庭における教育は基本生活技能以外に、教義の説明を通して家庭における宗教儀礼を実践し、チベット仏教の宗教信仰を確立させ、チベット仏教の宗教倫理原則を注入するのである。新しい生命が誕生してからすぐに代々世襲の家庭宗教経験を目や耳から覚えさせるが、その中には教義の暗記やチベット仏教倫理規範の詳しい了解、遵守なども含まれている。宗教生活と世俗生活の一致性によってチベット仏教による家庭教育は、日常生活の倫理道徳と人間としての準則等幾つかの方面に現れている³。

家庭はチベット民族によるチベット仏教信仰の受容、帰依の過程における発生源としての地位を占めている。よって、家庭の宗教教育は、チベット仏教そのものの重要基盤であるばかりでなく、チベット仏教自身の文化伝承保持者にもなっているのである。

チベット仏教文化において、家庭における宗教教育は、個人成長の幼年時代に断続的に行われるので、宗教教義と宗教倫理がほとんど直接、如何なる情緒の影響もなく、順調に個人の心に注入され、それによって倫理生活の基礎になるのである。従って家庭の宗教環境において、どの成員も宗教的教誨を聞きながら、宗教儀式を体験し、年長者に従いながら生活の第一段階を過ごし、次第に自分を主体とする「私」として存在するようになるばかりでなく、チベット仏教という特定宗教集団の一員としての存在を認識した時、個人がどのチベット仏教集団に帰属するかという宗教身分も確立されることを

意味する。

チベット仏教の家庭宗教教育は、結果として、そこに属するすべての個人の本能的行為を抑制し、チベット仏教信仰の受容、帰依のほかチベット仏教文化を継承し、チベット仏教に基づく道德観を中心とする独立した人格を持つ社会人に成長させる役割を担っているのである。そうした意味で、チベット仏教の家庭宗教教育は、チベット人個人の社会化を育成する過程で、チベット仏教文化を伝承させることに成功したと言えるであろう。

チベット仏教寺院は、社会における地位が常に上位にあったため、長時間にわたって有識者の集まる場所、および歴史文化典籍と文物の収集、秘蔵の場所になっただけでなく、教育センターにもなったのである。学校がほとんどないチベットでの「寺院で勉強する」という表現は、正にこのような特殊な現象に対する描写であろう。寺院ではチベット仏教文化伝承のもう一つの重要な拠点として学院式の教育が行われていた⁴。また、家庭における宗教教育と比べれば、より正規の訓練方式をとり、学習内容もより系統的である。

現在でも依然としてチベットでは、チベット仏教文化が寺院に集中している。大量の経典・典籍が寺院に保存されているだけでなく、大勢の博學で、高德の大師が集まっている。寺院の厳格な生活規律と静かな環境は、大師が教理を教えたり、善に導いたりする所であり、また、学僧が仏法を追求し、学問を研修するのに最適な場所である。このため、寺院は「家」と学校との結合体であるといえる。そして、出家者が入寺すると、正式に僧院生活を始めると同時に、正規の寺院教育も受け始めるのである⁵。

寺院において教育を受けられる僧侶の比率は少ないが、教育を受ける僧侶の学習内容、および順序と規律に対する厳格、そして整備された制度は、勝手に変更することは出来ない。特に級別によって勉強する中で、相互弁論、暗記を中心とする詰め込む学習といった学習方法は、仏教教義の理解を深め、記憶強化、さらには応用の促進にとっても有益で、継承の余地が大いにあると思われる⁶。

寺院教育は、主に知識の増加と徳行を修行の目的とし、記憶重視、弁論能力の育成、師承重視の特徴を持っている。中でも特に記憶訓練を重んじる。

このため、チベット仏教の寺院教育は、長期にわたる発展過程の中で、次第に教学体系、内容、方法、学位、試験等の面において整備された体系が形成されたのである。特にゲルク派の統治期にこのような制度が完成したといえる。その特徴として以下の三点を指摘できる。

第一、暗誦を強調する。經典暗誦は、学僧に対する基礎として、寺院教育の始まりとなっている。このような暗誦による記憶訓練は、学僧に対して正確に大量の経文と典籍知識を暗記させたため、仏教文化の伝承と伝播に大きな役割を果たしたのである。一方では、暗誦訓練は、実は知識の蓄積につながり、知識がある程度に蓄積することではじめて量変から質変に達し、自由自在に知識を運用できるのである。このような記憶訓練はその後の弁論能力の向上にも良い基礎作りになるだろう。

第二、弁論能力を育てる。宗教は迷信と違って特有の弁証的哲学体系を持っている。弁論は高度な学習が要求され、寺院教育の中で盛んに行われている。弁論は、實際上、法相概念と理論命題および論証過程と最終結論に対して思弁推理を行い、正反両面の反復論証を経て、できる限り観点或いは命題を論理に合わせ、成り立たせることである。弁論を通じて、学僧の独立思考と論理推理の能力が培われ、学識レベルと総合学術能力も向上をはかることができる。

第三、師承を重視する。尊師と師承は寺院教育の伝統である。チベット仏教は教派が多く、文化伝承体系もそれぞれ異なるため、弟子入りが重要であり慎重に行われなければならない。弟子入りというのは、先生の伝承体系に対しての認可と受け入れである。学僧は一方では師に従って学問を追究し、師の教えを受け継ぎ、もう一方では、必然的に当該体系の文化継承と宣揚の重責を担うのである⁷。

以上の指摘から分かるように、寺院教育は正規の学校教育として、チベット社会におけるチベット仏教文化の多くの優れた人材を育成したのである。同様に全民信教を特徴とする寺院教育は、学識深く、品行高尚なチベット族学者を大勢育てた。チベット族の学者は二つの責務を負うことになったのである。一方では、宗教信徒としてチベット仏教文化を把握し、チベット仏教

文化の伝播、発展の重責を担ったのである。また、社会公民としての社会模範的存在になり、チベット民族社会全体を更なる段階に発展させ、チベット社会の進歩と繁栄を推進したのである。

三、チベット仏教文化伝承

チベット仏教は、仏教がチベットに入ってから適応し、発展した一つの宗教である。仏教寺院はチベットにおいて特殊な地位にある。寺院は社会の経済、政治、文化等多方面と緊密に繋がっているため、必然的にチベットの多くの文化特性が反映されている。寺院は物質的文化を維持してきた施設であるため、寺院研究は、必ず文化上の特徴も直観的に体现できるだろう。

例えば、チベット史上初めての仏教寺院―サムイェ寺が落成し、インドから比丘12人が招かれ、シャーンタラクシタ（Śāntarakṣita）が自ら六人の吐蕃僧に具足戒を授けたので、チベット初の正式な仏教の僧侶が誕生し、チベット最初の僧伽（出家教団）が結成された。その後、サムイェ寺内に妙法学校が成立した。同校はチベット教育史上において重要な意味を持つ。初期の妙法学校は、教師と学生の人数が少なく、組織機構と教育制度等も不完全であったが、以後の寺院教育、さらにはチベットの教育に対する影響を強めていった。そして、妙法学校の役割を踏まえるならば、チベットにおける学校教育研究は、最初に寺院教育の開始を考えなければいけないだろう⁸。

サムイェ寺建立後、仏教の発展につれて寺院がチベット各地において雨後の筈のように建設され、チベット仏教は興隆を迎える。特にゲルク派のガダンポザン地方政権樹立後、ゲルク派の勢力が強大になるにつれて、チベット仏教文化の発展はピークに達し、チベット民族が全民信教となり、大小寺院がチベットの至る所に見られるようになる。

『チベット風土志』によると、乾隆二年（1737年）第七世ダライ・ラマ、カルサンギャムツォ（skal bzang rgya mtsho）報告による理藩院数は、ダライ・ラマ所属の寺院3,150ヶ所、僧侶302,560人、パンチェン所属の寺院327ヶ所、僧侶13,670人となっていた。ゲルク派以外の各教派所属の寺院を

加えれば、この数字を大きく上回るだろう。この時期の寺院は、既に豊富な経済力と整備された組織体系を有した上に、制度化、模式化とプロセス化の特徴も持つようになったのである。つまり、この当時の寺院は、前述のように文化教育の中心であったばかりでなく、チベット地域の政治集会と経済貿易の場にもなっていたのである⁹。

四、宗教文化の環境保護に対する影響

チベット民族は、非常に道徳心のある民族である。「大多数の民衆は勤勉、節約、素朴で、善行喜捨を好み、賢人を尊重し、儀礼を重視する。また本分を守り服従し、慈悲心が深く、愉快的心をもち、静かで寡欲、未来重視といったことはすでに普遍的な習慣となっている¹⁰。」チベット文献『礼儀回答写卷』の記載によると、仏教伝来以前には、チベット民族は農牧民族の特徴を有する比較的立てられた道徳規範を持っており、この道徳規範に基づいて当時のチベット民衆の間の倫理関係を調節していたのである¹¹。温和上品で、内包善良は、東方民族の道徳標準の特徴として見られるもので、チベット民族の性格に対しても大きな影響をもたらした。仏教伝来以降、これらの道徳観念は、仏教道徳観念と融合して継承され、影響を強めた。

厳密に言えば、チベット仏教文化の本質は道徳説といっても過言ではあるまい。チベット仏教の各宗派から見れば、人間が解脱して仏陀になれるかどうかは、心中の善性を明白化し、拡充させられるかが鍵となるのである。チベット仏教は十善戒を示し、日常生活の中で道徳が最も重要なことであると人びとに説き示しているため、道徳修養の役割が強められたのである。これは『サキャ格言』、『賢者喜宴』等をはじめとする多くの仏教文献において明示されている。

チベット民族の生活習俗は長年にわたって形成された生活観念と日常生活習慣である。それは宗教禁忌と関連し、宗教禁忌観念が日常生活に反映されれば、何らかの習俗表現となるのである。

宗教禁忌は、チベット仏教礼儀の一つの重要な内容であるばかりでなく、

同時に一種の規範行為としてチベット民族社会への拘束力を持つ社会制約形態となっている。宗教禁忌はチベット仏教徒の神霊神力に対する畏敬から生まれ、観念、意識上の強化を経て、宗教体験の感覚が加えられ、このような畏敬感がさらに強烈になり、信者が自発的に教義に規定された戒律を守るようになると同時に、自身の行為も厳格に制限、禁戒するようになるのである。

チベット仏教の禁忌は、禁忌事物が普通の事物と混淆してはいけないという意識が強調されている。そのため、一般人の神仏崇拝の心情が強化されたのである。人間から生まれた世俗禁忌と違って、チベット仏教の禁忌は、神聖力に対しての畏敬を起源としたものであり、神聖力が人々に福祉をもたらしたため、人々も「神聖」に対して義務を持つようになったのである。これによって禁忌は、人々の「神聖」に対する義務として、人々の行為を指導する時、世俗よりも神聖性を持ち、有効的にチベット民族としての役割意識を育て、チベット民族の集団表象として、民族全員の信仰と感情の総合になったのである。

チベット民族の民衆は、定期的に宗教儀礼に参加しているので、儀式規則に慣れ、禁忌意識も強化されたのである。こうした共同的経験は、共同の信仰と価値観を持つチベット仏教集団に対して認識面と情感面の一致性を与え、信徒の精神面も一致させたのである。この外、宗教禁忌は具体的に日常生活にも反映された。飲食禁忌、屠殺の禁忌など、および山、水、森林に対する崇拝等がそうである。屠殺は、チベット民族の生活習慣であるが、これはただの禁忌行為の表面反映のみであって、もっとも重要なのは、これら表面現象の裏にチベット民族の素朴な環境心理と環境保護意識が隠されていることにある。

ここで、チベット仏教の飲食禁忌と山水に対する崇拝を例に取って説明しよう。「民は食をもって天となす」¹²という言葉を知らない中国人はいないはずである。「好みは論争なし」、何を食べるか、どうやって食べるかに是非の道理はないだろう。しかし、千百年にわたって形成された飲食習俗および「食べる」ことから誘発した様々な奇特現象は、それぞれの民族文化の差異と民族の個性が反映されている。

チベット民族の飲食の特徴は、牛・羊肉を主として麺類を兼ねている。また、前もって主婦が食べ物を平均に全員に分ける「主婦分食」という飲食習慣である。分配順序もルールがあつて、年寄り優先である。食べ物を受ける人は、敬意を表すために必ず両手で受け取らなければならない。

チベット仏教文化の飲食禁忌の規定によると牛、羊以外の動物、例えば、鶏、魚、ウサギ等を狩猟、食用にしてはいけない。このほか、特に犬の禁食が強調されている。犬は家の守り、牧畜の看護もできるからである。犬は忠実を本性とすることによって草原牧民の生活に重要な役割を果たし、チベット民族に好まれるようになったのである。

これらの飲食禁忌、すなわち食べ物に対する取捨選択現象の裏には、実際に人間の欲望に対する抑制と自制力に対する試練も隠されている。飲食禁忌によって大量の動物が殺害から逃れ、種の絶滅からも救われたのである。チベット民族は、大自然を最高の神霊とし、土地や山林、湖畔も神聖であつて侵犯されてはいけないものと考えて、神霊の名義で山林と湖を守っているのである。

例えば、山林での掘削や狩猟を禁止し、樹齢の長い高大な樹木と出会えば、敬虔な祈祷の上で、木の枝に布を付け、神霊の保護を祈るのである。湖を汚さないために湖での洗濯を禁止する。さもなければ神霊に対する不敬として最も厳しい賞罰が与えられるのである。チベット民族は金銭を重視せず、普通の穀類、樹木、水源を一番大切にしている。これらの禁忌遵守によって生命を大切にし、動物を保護し、人間と自然とが調和の取れた付き合いをする環境倫理観念は、すでにチベット民族の心に深く根付き、生活とは切り離せなくなっているのである。

チベット仏教文化は、宗教礼儀という具体的行為方式を通じてチベット民族の宗教儀式を継承するとともに帰属感が強められたと同時に、文化に含まれた生態環境観念も代々継承されてきたのである。

五、チベット仏教の伝播と発展

チベット仏教文化の伝播と発展は、常に社会に影響するという状態ではなく、社会に適応する状態の中で進行してきた。その形成も当時、当地の社会環境に適応した結果である。歴史上において、チベット仏教は二度の大きな変革と適応過程を経験している。

一度目は、外来仏教文化のチベットにおける本土化と民族化の過程に反映されている。インド仏教と中国仏教がチベットに入ってからチベット本土宗教—ボン教と衝突し、多くの闘争と融合を経て、最終的にチベット社会に適合し、チベット民族に普遍的に受け入れられるチベット仏教文化が形成されたのである。本土化と民族化は、すなわちチベット仏教の文化適応過程とも言えよう。

二度目は、チベットにおける政教合一制度である。15世紀、ツォンカパはチベット仏教の改革と、ゲルク派の創立によって、滅亡に瀕するチベット仏教を救った。ツォンカパの改革は、宗教信仰の中の究極的な目的は維持しつつ当時のチベット社会の現状に目を向け、世俗社会問題を解決する具体的な実践をしたことである。当初、政教合一制度の設立は、チベット仏教文化が当時の社会条件に適応させるための自身の存在と発展を求める一種の選択であった。実際に政教合一制度は当時のチベット社会の安定に積極的な役割を果たしたのである。

歴史的に見れば、社会発展に適応したチベット仏教は、その文化理念に表現されているばかりでなく、世界のいかなる宗教文化の発展であっても、何れも社会環境に対する適応しなければならない問題を抱えている。

世界における近代化は、人々の生活様式を変えたばかりでなく、人々の思想観念をも変えている。チベット仏教文化も現代社会との相互接触の中で、世俗世界の変化の影響を受容するだけでなく、日々の世俗化の傾向も現れたのである。ここで指摘しなければならないことは、チベット仏教の世俗化は、文化面において、社会の現代化に対する適応程度の面で表現されていることである。ここからも分かるように、世俗の潮流に推進されて、現代のチベッ

ト仏教文化は二つの困難な状態に直面したのである。

一つは、伝統を継承し、宗教信仰の神聖性を保ちつつ、社会と人生に究極的な目的による解説を提供しようと希望することである。もう一つは、世俗化への道を通じて世俗的価値に適応しながら、現在の社会生活に対して積極的な役割を果たすよう希望していることである。しかし、チベット仏教文化がこの困難な状況から抜け出すには、今後、チベット仏教文化の継承と発展の過程の中で、現代社会の発展を受容するか、教義に反する発展を拒絶、改革するかを選択しなければならないであろう。

例えば、チベット仏教礼儀における飲食禁忌は、信徒の食べ物の種類を制限してきた。しかし、現代科学技術の発展に従って、食べ物の種類が何倍にも拡大され、食べ物の品種も非常に豊富になった。伝統の飲食習慣、牛、羊肉のみを主要食品とすることを堅持することは、栄養学的にビタミンをはじめとする栄養成分不足となり、個人の身体の健康に不利だけでなく、民族全体の身体的な素質も影響されるに違いない。さらに、飲食禁忌は、健康増幅を目的とする現代の食生活と現代生活理念と一致しないため、チベット民族の飲食習慣は宗教信仰原則に違反しないという前提の下で、適切に現代の食生活を取り入れるであろう。

また、教義と宗教禁忌の中にある戒律は、伝統チベット民族社会における人々の生活行為の基本指導でもあり、また生活行為を批判する主要な標準といえるものでもあった。前近代、確かに、戒律は社会約束の役割を果たしたが、現代社会では、人々の生活行為の価値基準は多様であり、判断基準も理性と法律に依拠するようになった。結果、宗教禁忌の持つ普遍的な社会効力は無くなったのである。よって、チベット仏教もこのような社会変化に適応させるための変革が必要となるだろう。

チベット仏教の礼儀に反映された誠実、節約、信用を守る道徳倫理および自然を愛し、動物を守るという生態環境保護倫理は、チベット仏教文化の精髓として宣揚されるべきであろう。さらに人々の自覚意識となり、経済活動、人間交際等の世俗生活の倫理的な根拠として、理性的に経済活動に従事し、平等、友好的に交際するのを指導しているのである。事実上、チベット仏教

文化が提唱する道德倫理規範は、宗教信徒の生活準則であるばかりでなく、さらには全社会の経済発展による一種の文化精神ともなるべきであろう。

六、まとめ

宗教教育、特に寺院教育は、チベット仏教文化伝承の重要な形式として現代化発展に適応させると同時に、幾つかの積極的な調整も行われるべきである。例えば、寺院教育の機能は、以前の経文解説や仏法伝授から文化遺産の観光的資源の活用を学ぶ場へと変わるべきである。また、伝統的寺院教育は現代化の技術が利用できるであろう。コンピューター技術と映像技術の利用によって、学僧がより仏教教理を修学、理解することを可能とし、資料保存の分野においても多くの利用が期待される。

これらは何れもチベット仏教が現代社会に適応するための提言であるが、近代化によるチベット仏教文化に対する根本的な衝撃は、伝統文化教育において、民衆の持つ敬虔、苦行、禁欲、利他精神等が、世俗社会の価値観念と行為からの強力な挑戦を受けたことである。

現代社会におけるチベット民衆は、一方ではチベット仏教の信仰者であり、もう一方では社会の公民でもある。中国による少数民族に対する公民教育は、チベット仏教文化の一部分となるようにすべきであろう。特に注意すべきことは、寺院教育と並行する民族学校の設立がチベット地域の実際に符合し、チベット民族の特色を持たなければならないことである。

第一に、民族言語教育を公民教育の起点とする必要がある。チベット民族の小中学校に中国語とチベット語の二つの言語課程を設置し、二つの言語教学の方式を採用する。その目的は、チベット族の学生は中国語もでき、さらに系統的、正規に民族言語を学習することによって、現代科学文化知識をも獲得し、チベット仏教文化にも精通する学者型バイリンガルな人材の育成もできるためである。チベット仏教文化の伝承は、単なる口頭伝承に留まらず、これらの人材を通して、チベット仏教文化遺産に対する文献整理を行い、これを基礎にして、文化に対する深い探求、分析研究が行われることになるだ

ろう。反対に、言語が聞いたり話したりすることのみに留まれば、深淵な文化内包が次第に失われることになり、最終的には言語の精神と魂も喪失されるだろう。よってチベット仏教文化に対する資料整理と文献研究は、チベット仏教の文化伝承を有効的に促進する役割があると言えるだろう。

第二に、チベット民族文化の基礎に立脚して現代的資質教育を行う。チベット民族の青少年に対して、民族の文化を尊重するばかりでなく、他の各民族の言語文化と宗教信仰をも尊重すべきであることを教育する。彼らは国家体制、方針政策を了解し、民族文化伝統に立脚して、現代文明に符合する道德標準を民族文化の道德資源と結合させ、民族性を絶えず完備した、非の打ち所のない公民であると同時に、彼らをチベット仏教文化も一層発揚できる人材になるよう養成することが重要である。

総じて言えば、チベット仏教倫理を含む中国における数多くの優秀な伝統文化資源は、現代調和の取れた社会、平和世界の建設に貢献すべき責任と潜在素質を持っている。同時に心身快樂、自然親和、人間関係の和睦、世間の平和、社会和諧という願いも叶えられるのではないだろうか。

如何なる民族の伝統文化であっても絶えず革新しなければならず、すなわち伝統文化を基礎にして再創造、革新を行わなければならないことは言うまでもないことであろう。こうして初めて、一つの民族文化は永遠に盛んな生命力と活力を煥発できるだろう。チベット仏教文化の伝承と発展も例外ではないと思われる。

(大正大学総合仏教研究所講師)

【参考文献】

- 烏丙安、1985年、『中国民俗学』、遼寧大学出版社
 王堯ほか、1988年、『敦煌吐蕃文書論文集』、「礼儀回答写卷」、四川民族出版社
 任繼愈編、1998年、『宗教大辞典』、上海辞書出版社
 戴燕、2006年、「チベット仏教文化の伝承ルート及び当代適応性研究」、青海師範大学学報 第3期

赤烈曲扎、1982年、『チベット風土志』、西藏人民出版社

牛黎濤、2006年、「チベット家庭内部の道德観念」、大正大学綜合佛教研究所
年報、第28号

牛黎濤、2007年、「チベット寺院の組織構造と教育状況」、『松濤誠達先生古
稀記念梵文学研究論集』、大祥書籍

牛黎濤、2008年、「中国におけるチベット仏教に関する研究」、『仏教と文化』、
山喜房仏書林

牛黎濤、2008年、「チベット近代の寺院教育」、佛教文化学会紀要、第16号

牛黎濤、2008年、「近代中国のチベット僧侶教育制度」、大正大学綜合佛教研
究所年報、第30号

牛黎濤、2012年、「チベット寺院教育と現代化教学」、佛教文化学会紀要、第
20号

牛黎濤、2013年、「チベット文化——伝承寺院」、大正大学綜合佛教研究所年
報、第35号

喬根鎖、2004年、『チベットの文化と宗教哲学』、高等教育出版社

葉客南、2004年、『文化中国——先進文化の建設と創新』、南京大学出版社

【注】

¹ 牛黎濤、2008年、「中国におけるチベット仏教に関する研究」参照

² 同上 参照

³ 牛黎濤、2006年、「チベット家庭内部の道德観念」参照

⁴ 牛黎濤、2012年、「チベット寺院教育と現代化教学」参照

⁵ 牛黎濤、2013年、「チベット文化——伝承寺院」参照

⁶ 牛黎濤、2007年、「チベット仏教寺院の組織構造と教育状況」参照

⁷ 牛黎濤、2008年、「近代中国のチベット僧侶教育制度」参照

⁸ 牛黎濤、2007年、「チベット寺院の組織構造と教育状況」参照

⁹ 牛黎濤、2008年、「チベット近代の寺院教育」参照

¹⁰ 喬根鎖、2004年、『チベットの文化と宗教哲学』参照

¹¹ 王堯ほか、1988年、『敦煌吐蕃文書論文集』、「礼儀回答答巻」参照

¹² 民以食為天

